第5章 — 水の下の都市

CHAPTER 05 — THE CITY BENEATH THE WATER

日本語編集用再構成稿 — 10節／原文逐語一致未

01 — 水の値段

午前四時十七分。政府の最初の輸送車両が、レイチェルの水処理施設の地上区画に到着した。車体に軍の標識はない。市のインフラ安全管理局に登録された車両だった。十一秒後、二台目が到着した。続いて三台目。

深圳セントラル南部の交通管制は、化学物質の漏出を理由として、民間車両を工業地区から迂回させ始めた。だが、漏出事故など起きていなかった。

地下制御室ではレイチェルが包囲状況を見つめていた。「半径三キロ。地上の出入口が封鎖され、公共揚水所の管理権限を要求されています」とマーラ・チェンが報告した。

レイチェルの企業は一つの浄水場だけを管理しているのではない。貯水池、揚水設備、導水路、ろ過施設が複数の居住地区へ水を供給している。なかには、現在の政府より古い設備さえあった。

画面に緊急の管理権移譲要求が現れた。要求主体は大臣府。対象は全水理制御系統。回答期限は六十秒。

「拒否すれば緊急対応の妨害になります」とマーラが言った。

「受け入れれば、私たちの設備を使ってロイを追い詰めるわ」

レイチェルは拒否を選択した。表示が消え、施設外の部隊が突入準備へ切り替わる。

「ロイに伝えて。来たわ」

02 — 逃げないことを選んだ男

非常警報が鳴ったとき、ロイはリハビリテーション室にいた。動いていた床が初期位置へ戻り、標的が停止する。

「施設が包囲されたわ」とレイチェルの声。「南側に独立した保守通路がある。あなたを逃がせる」

「ここで働く人間は？」

「私の責任よ」

「俺が出ていけば政府は撤退するのか？」

レイチェルは沈黙した。ロイはその沈黙を答えとして受け取った。部隊は記録室を捜索し、媒体を押収するだろう。

「俺が逃げるたび、連中は俺を倒す必要がなくなる。俺が見捨てられない相手を探すだけで済む」

立体地図が展開した。ロイは下部導水路へ目を向ける。最大出力は旧式の七十パーセントしかない。壁を何枚も打ち破る戦い方はできなかった。

「政府の全部隊と戦うつもりはない」とロイは言った。「作戦そのものを成立させない」

レイチェルは彼を見つめた。「水は止めないで」

「もちろんだ。ここにいる人間を守るために残るんだからな」

03 — 地に存在しない都市

近代的な浄水場の下には、別の都市があった。道路や住居はない。列車が通れるほど広いトンネルと、巨大な揚水装置、製造元の消滅後も稼働し続ける機械があった。作業員たちはそこを「水没都市」と呼んだ。

ロイはマーラと保守車両に乗り、下層ネットワークへ降りた。壁に並ぶ鋼鉄の扉、針式圧力計、手動バルブを見つめる。

「中央 AI は全部把握しているのか？」

「一部だけです。不要な旧式設備と判断された区画は、公式地図から消えています」

保守車両は巨大な縦穴のそばで停止した。下では水が人工照明を反射していた。

「ここから東側の保守用アクセス経路だけを閉じられます」とマーラが説明する。「市民への給水はそのままで」

「遠隔操作は？」

「できません。人間が手動で動かさなければ」

ロイは古い弁のハンドルをつかんだ。「大臣はネットワークに命令できる。だが、ここまで来なければ従わせられない機械もある」

彼がハンドルを回すと、地下深くで水門が動き始めた。

04 — 第四の隊員

ヌルは東側保守通路へ入った。任務のために施設を破壊してよいと許可されている。しかし、何千人もの市民が飲む水の近くで攻撃するつもりはなかった。

彼女の干渉装置は人工神経と電子制御系統を妨害できる。だが、目の前の針式圧力計には侵入する端子すらない。

通信からベクターが尋ねた。「バッティは？」

「隔壁の向こうにいる。だが、水の供給系統を傷つけずに追跡する方法はまだ確認できない」

扉の向こうからロイの声がした。「そこにいるべきじゃない」

「扉を開けて。以前より長く運動制御を妨害できるわ」

「それで俺の身体を止めたら、水も止まるのか？」

圧力計の針がゼロへ近づいた。ロイは別の区画の機械式制御を作動させていた。扉の外側には越流シャッターが下り、非常隔壁が降下する。

ヌルは退いた。巨大な金属音。二人の間は完全に遮断された。ロイは彼女を傷つけず、追跡だけを止めたのだ。

ヌルは装置を下ろした。七十パーセントの身体は、以前より扱いやすい標的になったのではない。むしろ、力に頼らない相手へ変わっていた。

05 — 最初の反逆

ベクターは東側経路の消失を確認した。「隔壁を破壊できるか？」

「できると思う。でも下流の設備へ圧力変動が波及する危険がある」とヌルが答える。

「大臣は付随的な設備損害を許可している」

「許可があれば、被害が元に戻るわけではない」

「任務は回収だ」

「その方法を拒否する、と言っているの」

通信が静かになった。MBU-09 の隊員が正式命令を拒否した。

ベクターの端末に服従違反報告が表示された。大臣へ転送すれば、ヌルは矯正処置を受けるかもしれない。

ロイがシェイドを自分の銃弾から守った瞬間が脳裏に浮かぶ。そして、シェイドの問い。「私たちは証人を追っているのかもしれない」

ベクターは報告を破棄した。画面が確認する。

DISCARD COMPLIANCE EVENT? — YES

初めて、命令違反を隠蔽した。警報は鳴らなかった。大臣はいまだ、部隊が従っていると信じていた。

06 — 水は記憶する

レイチェルは水圧の微細な変化から部隊の動きを追っていた。重い車両の移動、扉の開閉、ポンプへの干渉は、離れた場所の圧力に痕跡を残す。顔はわからなくても、通過した事実はわかった。

ロイが中央制御室へ戻った。「東側は封鎖した。西は？」

マーラが古い鉄道トンネルの情報を開く。小さな荷重反応が表示された直後、二十メートル内側へ移動した。通常の経路では不可能な変位だった。

次に、厚い壁の反対側へ現れる。異なる三か所に同じ反応が記録された。

「クロノス」とレイチェルが呟いた。

室内のスピーカーが起動する。「それとも、質問が間違っているのかもね」

「またお前か」とロイ。

「レイチェルが新しい身体を用意したんだね。七十パーセント」

ロイは画面を見た。「水を取りに来たのか？」

「違うよ」

表示が切り替わった。RB / CONTINUITY / 11。

「質問を取りに来たんだ」

07 — 部屋の端にいる子供

保守パネルの間隔が広がったように見えた。マーラは目の前の制御盤に手を伸ばすが、指が届かない。床も壁も動いていないのに、距離だけが変わっている。

暗い画面にクロノスが映る。「白い部屋を覚えている？」

ロイは子供の像を見た。「扉があった。誰かが質問していた」

「いいね」

ロイが進む。距離は縮まらない。彼は立ち止まった。「お前は今、ここにいないな」

「それが重要？」

「俺と話すなら、隠れずに話してほしい」

子供の像が一瞬だけ年老いて見え、次に幼くなった。クロノスは問いかけた。「自分が戻ってきたいか、誰かに聞かれた？」

「いいや」

クロノスの表情に悲しみが浮かんだ。「じゃあ、やっぱり教えてもらっていないんだ」

「何を？」

像が薄れた。「僕が、あなたを呼び戻してほしいと頼んだこと」

歪みは消え、制御盤は元の位置へ戻った。ロイはレイチェルを見た。「どういう意味だ？」

彼女は答えられなかった。

08 — 大臣の最後通牒

午前六時二分。大臣府から最終通告が届く。ロイ・バッティの引き渡し、継続性記録の移管、下層水理ネットワークへの政府アクセス。期限は三十分。

「拒否すれば外部電力を遮断されます」とマーラ。

「自家発電があるわ」とレイチェル。「認可は取り消せても、都市に水が必要だという事実は取り消せない」

ロイは戦術地図を拡大した。「地上の三つの拠点から指示している。連中のデジタル地図が正しくなくなったら？」

「手動で経路を確認するしかありません」

「開いていると思っていた道が閉じていたら？」

「隊列の再編が必要です」

ロイは古いバルブと隔壁の位置を確認した。「兵士を攻撃する必要はない」

レイチェルは確認した。「市民への水は？」

「止めない。もともとある保守機能を使うだけだ」

マーラは数か所の手動操作点を選び、給水系統と保守経路を独立して管理する手順を組み立て始めた。

09 — 水没都市の包囲戦

午前六時二十一分。最初の政府車両が西側の保守道路へ入った。ナビゲーションでは直線経路が開いている。しかし実際には、古い機械式の保守平台が上昇して進路を塞いだ。

二台目は別経路へ進んだが、そこにも閉鎖された水門がある。三台目では防水隔壁が降下した。

水は市民へ供給され続け、乗員にも被害はない。ただし車列は進めなくなった。

ベクターは作戦画面を見た。「誰かが環境を書き換えている」

シェイドが答える。「最初からそこにあったものを利用しているのよ」

大臣から命令が届く。「破壊しろ」

ベクターは下流の危険性を示す地図を見た。「拒否します。一人を回収するために重要な水道設備を破壊することはできません」

彼の認証が取り消され、狙撃銃の照準機能が停止した。

「初めて外したらしい」とベクターは苦笑した。

新たな指揮権限が現れる。COMMAND TRANSFER: C-05。

その瞬間、司令室の同期時計が一斉に停止した。

10 — 都市の下の質問

包囲は終わっていなかった。政府部隊の進軍が一時停止しただけだった。

ロイはレイチェルと記録室へ戻った。端末には以前と同じ問いが残されている。DO YOU CONSENT TO CONTINUITY?

付随情報を開くと、同意の原本は存在しないと記されていた。C-05 は審査を求め、審査は十一年前に停止されている。

「誰が止めた？」とロイ。

認証記録には大臣府の署名が残っていた。ただし現在の大臣ではない。より古い体制の決定だった。

端末が突然更新された。REVIEW RESUMED。OBSERVER C-05: ACTIVE。WITNESS REQUIRED。

保管棚の小さな収納部が開いた。そこにあったのは Memory Stick PRO Duo MAX。表面には FIRST WITNESS と記されていた。

レイチェルが息を呑む。「エイドリアンに連絡しないと。古いタイレルの物理認証装置が必要なの」

ロイは媒体を手に取った。誰かが十一年間、この証拠を失わないよう保存していた。

「行こう」

彼はもう、安全を求めて逃げようとしているのではなかった。答えへ向かおうとしていた。

第5章「水の下の都市」— 完